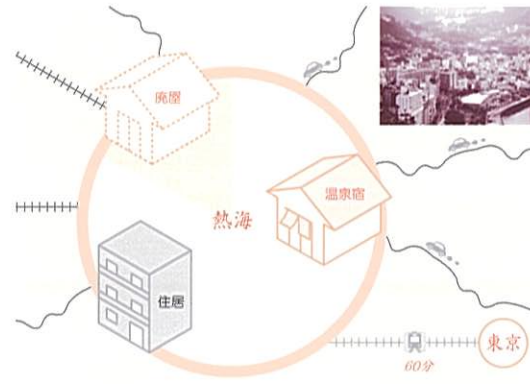


通りすぎるだけで、温泉の湯を味わえないでしょうか。



温泉街の現状

豊富な湯量を誇る熱海ではあるが、バブルの崩壊、価値観の多様化といった時代を経て、温泉街が繁栄する時代は終焉を迎えた。かつて団体客であふれかえっていた熱海から客足が遠のき、個人客がゆとりや癒しを求めて旅をするようになった結果、団体客中心のホテルは次々と廃業に追い込まれていった。その結果、廃屋と化した建物が目立つようになり、温泉街としての街並みは損なわれてしまった。

しかし、近年は東京から1時間という立地条件、ライフスタイルの変化とともに、熱海を暮らす場所として選ぶ人も増えてきている。廃業におこまれた温泉宿跡地にマンションをはじめとする住居が建設されることで、熱海は観光都市と生活都市としての2つの顔を併せ持つ街として新たな発展が期待されている。



廃屋と住居一横丁

しかしながら、廃屋と化した宿の建ち並ぶ道は、依然として整備されておらず以前の賑わいも失われてしまっている。当然のように道を照らしていた宿の灯りは無く、薄暗い物静かな道が多く残ってしまっている。暮らす街としての変貌を遂げる中で、通勤路、通学路として利用されだしている廃屋が建ち並ぶこのような道を横丁ととらえることができないだろうか。



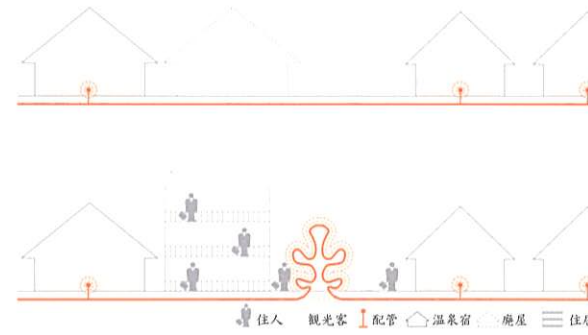
地下に張り巡らされる温泉用配管

温泉宿が建ち並んでいた熱海には、今も地下に多くの温泉用配管が巡らされている。現在は廃屋と化した宿にも、使用されていない配管が以前と同じように引かれたままである。



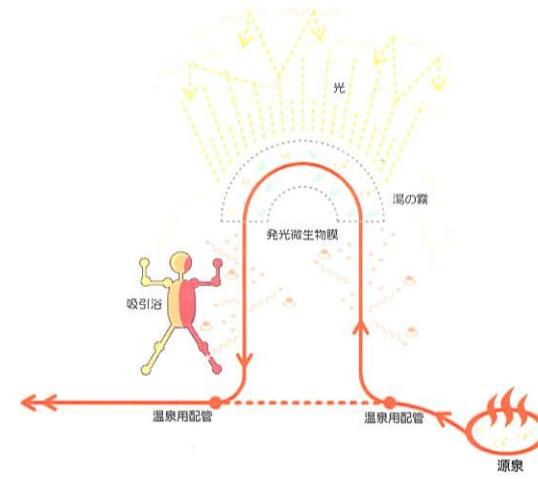
視覚化された配管

このような、温泉用配管を地上に引き出すことで、暮らす人にとって魅力ある温泉街の横丁を提案する。



湯煙の提灯

地上に引き出された配管は、多孔質な表面を通して、湯の霧を大気中に放出する。配管に付着する微生物膜は、温泉成分を豊富に含む湯の霧を栄養とすることで、わずかな光を発する。光は立ち上がる湯煙によって拡散され、薄暗い道を照らし出す。また、ほのかにあたたかいこの配管は、電力、ガスといった外的なエネルギーに依存せず、使われていない余剰の温泉だけを利用している。熱海の花である桜をモチーフにした配管（湯煙の提灯）によって、人は通りすぎるだけで吸引浴を楽しむことができる。



肌湯

〔温泉街の配管を利用した湯煙の提灯〕

